

## 周辺からの記憶 39

# 2020 年度 シンポジウム

村本邦子（立命館大学）

2023年度はサバティカルなので、この機会にと行きたい所をあちこち訪ねている。東北へ行くのも、昨年度よりプロジェクトでは年1回となってしまったため、4月、5月は東北に足を延ばしてきた。今回は、震災遺構となった石巻の門脇小学校と大川小学校、浪江の請戸小学校を訪問した。昨年、門脇小学校を最後に、岩手、宮城、福島の3県にある40件すべての津波による震災遺構が出揃ったとのことである。

門脇小学校は、津波をかぶり、火災にも見舞われたところである。鉄筋コンクリート3階建ての校舎はほぼ全焼したが、校内の教職員や避難住民らは2階から裏山に逃げて無事だった。学芸員が、体験者の記憶を言葉と絵で表現したという展示コーナーがあったり、最後には「心をほどく」というコーナーが準備されていて、植物や雨のしずくなどリラクゼーション系の映像が流れているなど、心のこもった暖かい展示がなされていた。それとは対照的に、児童78人中74人、教職員11人中10人が命を落とす大惨事となった大川小学校は、その後、訴訟も起こり、遺構として残すか否かについても紛糾したこともあってか、これまで2度訪れた時にはなかった柵があちこちに貼られ、胸の痛む悲しい場所になっていた。請戸小学校はできたばかりの時には見かけなかった原発災害についての浪江の町の記録がきちんと扱われていた。

7月には南相馬に原発事故を扱った新しいミュージアムもできるようだ。9月にまた訪れたい。



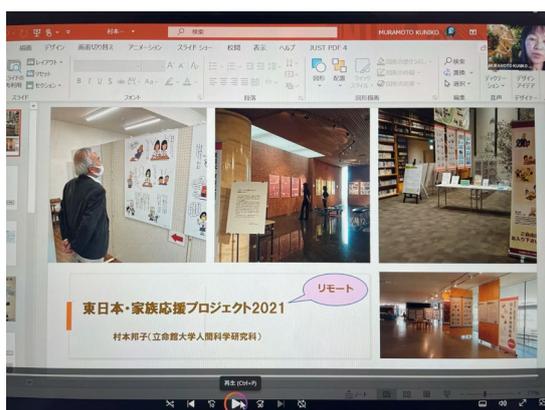
## シンポジウム「リモートから復興の証人 となった1年～聴く・学ぶ・繋がる」

### 第1部

#### 院生による活動報告

##### ～プロジェクトからの学び

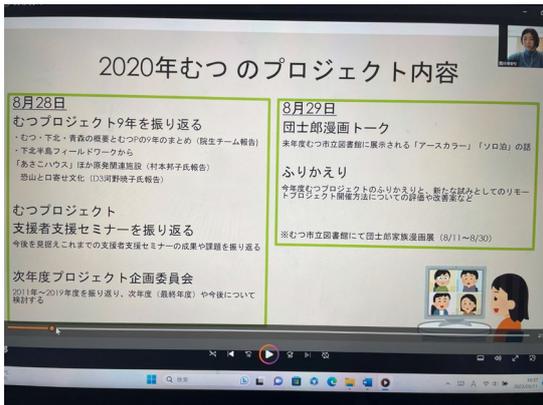
2021年2月20日、オンラインで、シンポジウム「リモートから復興の証人となった1年～聴く・学ぶ・繋がる」を開催した。最初に、むつ、多賀城・石巻、宮古、福島の各チームが報告を行い、現地の方からコメントを頂いた。



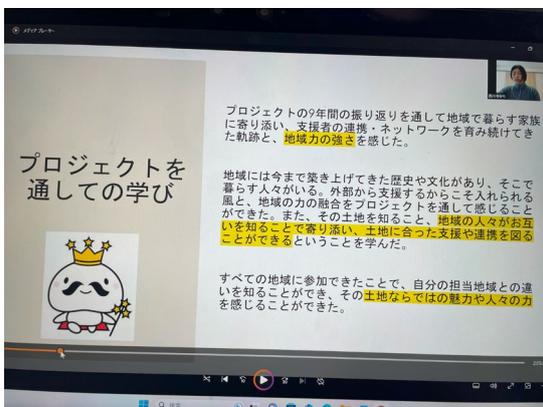
プロジェクトを通しての学びとして、むつチームからは、「プロジェクト9年間を振り返ったことから、地域で暮らす家族に寄り添い、支援者の連携、ネットワークを積み重ねてきた軌跡と地域力の強さを感じた。地域には今まで築き上げてきた歴史や文化があり、そこで暮らす人がいる。外部から入れられる風と地域の力の融合を感じた。土地を知ること、地域の人々がお互いを知ること、土地にあった支援や連携を図ることができる。リモートの形ですべての地域

に参加できたので、地域による違いを知り、それぞれの土地や人々の魅力を感じた。むつから始まるこのプロジェクトが、他の地域を牽引する役割を担っているという意識を現地の方も感じてくださっているからこそ、プロジェクトを毎年各地で継続することができ、あらたな人のつながりを生み出している。オンライン開催によって、現地の方も他の地域に参加することができ、あらたなつながりから連携や協働が生まれた。自分たち院生もさまざまな職種の院生や修了生とつながることができ、今後の生き方や働き方を考えることができた。」との報告だった。

杉浦裕子さん(青森県むつ児童相談所主任専門員)からは、「リアルで会って、むつの空気や匂い、食材など味わって欲しかった。それがかなわなかったことは残念だったが、リモートだったことで、これまでむつに来た修了生から、今こうしています、むつでの経験が活きていると聞き、感謝でいっぱいになった。地元では、いつも良い風を吹き込んでもらっているが、負担をかけているだけでなく、活かしてもらえているのだと嬉しかった。みなさんは、むつの娘や息子のような存在。先週は地元スタッフで集まって、今後のことを話し合った。私自身は3月で現役を退くが、継続への前向きな話が出ていてありがたい。力を頂いたと思う。」とのコメントをもらった。



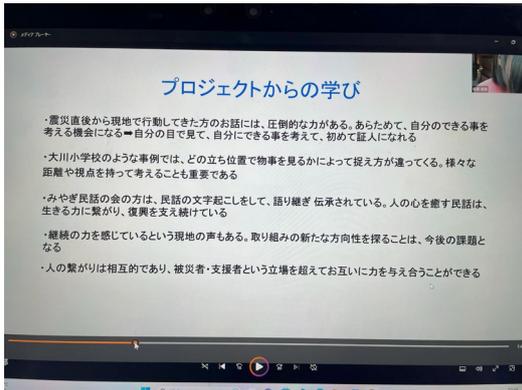
距離や視点をもって考えることも重要だと思った。みやぎ民話の会の方々は、民話の文字起こしをして、伝承している。民話は生きる力につながり、復興を支えている。継続の力を感じているという現地の声を聞き、取り組みの新たな方向性を探ることが今後の課題になると思った。人のつながりは相互的であり、被災者支援者という立場を越えて互いに力を与え合うことができると学んだ」と報告があった。



現地の丸山隆氏さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）からは、「あつという間の十年。これまで縦のつながりしか見えなかったが、リモートで横の広がりを見れて良かった。こうやってネットワークを作ってきたすごさを感じる。自分たちの体験を話したが、HPの報告を読み、よく感じてもらったことがわかり、良かった。最近も震度6で、4日間の断水があった。現地のひどさは自分が経験して、その場に居合わせることで初めてわかるものである。ない方がよいことではあるが、みなさんも、今後、そんなことがあった時、きっとプロジェクトの体験が蘇って、ああ、とわかるところがあるのではないか。語らなければ伝わらないし、聞いてもらわないと語れない。天気予報をしても天気は変えられないが、人間の行動は変えられるという言葉聞いた。先々頑張っって欲しい」とのコメントをもらった。



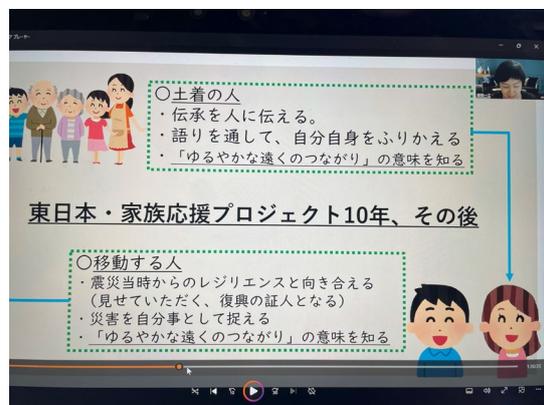
多賀城・石巻チームからは、「震災直後から現地で行動してきた方の話には圧倒的な力がある。自分の眼で見て、自分にできることを考えて初めて証人になれる。大川小のような事例では、どの立ち位置で物事を見るかによって捉え方が違ってくる。様々な

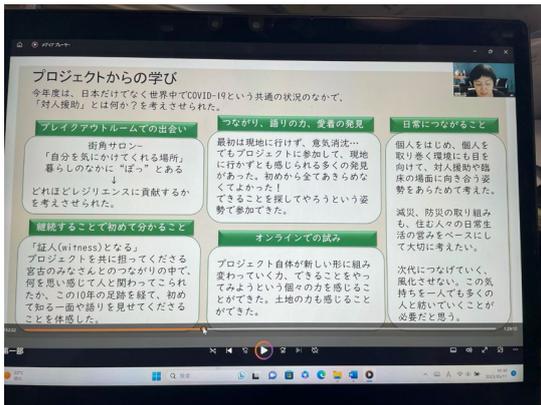


宮古チームは、「世界中が COVID-19 という共通の状況を抱えるなかで、対人援助とは何かを考えさせられた。リモートでも、ブレイクアウトルームでの出会いが良かった。自分を気にかけてくれる場所が暮らしの中にあることがレジリエンスに貢献する。最初は現地に行けず、意気消沈したが、現地に行かずとも多くの発見があり、初めからあきらめなくてよかったと思った。できることを探してやろうという姿勢で参加できた。継続することで初めてわかることがある。オンラインの試みで、プロジェクト自体が新しい形に組み変わっていく力、できることをやってみようという個々の力を感ずることができた。個人をはじめ、個人を取り巻く環境にも目を向けて、対人援助や臨床の場面向き合う姿勢を考えた。減災・防災

の取り組みも、日常生活の営みをベースに考えたい。次世代につなげていく、風化させない。この気持ちを一人でも多くの人と紡いでいくことが必要である」とのことだった。

現地の齊藤清志さん（宮古市企画部田老総合事務所所長）からは、「立命館にはずいぶんお世話になってきた。私は3年前からプロジェクトに関わらせてもらっている。十年ひと区切りと言われるが、被災者からすれば区切れない。これまでも、これからも、毎日、一日一日を重ねている。地元の小学生の半分以上が震災を経験していない時代になった。地元の人でも語りたがらない。こうして院生たちと会話しながら、思い出したり、語ったり、継続していくことが大事である」とのことだった。鷺田敦子さん（社会福祉法人若竹会多機能事業所すきっぷサービス管理責任者）からは、「私は7回目の参加。手探りだったが、少しずつ形ができてきた。次世代につなげていく、風化させないというのが被災地の私たちの役目である。宮古を思ってくれている人がいるということがありがたい」と言って頂いた。

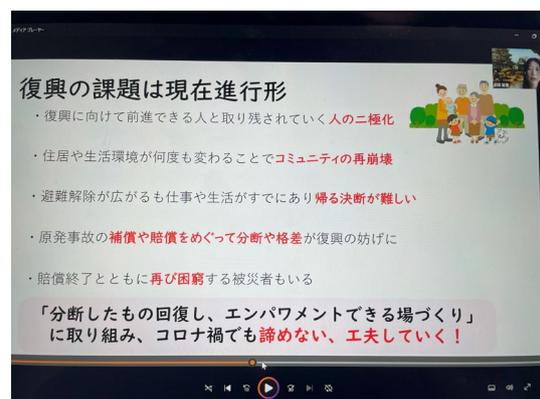




のことで、第二、第三の課題を抱えた人がたくさんいるなかで、忘れたいし、忘れる人が多い。みなさんのように、あらためて聞いてくれる、忘れないで頂けるということだけでありがたい。また、みなさんが調べたことを教えてもらうことで、伝承館などに行ってみようとかなど、自分の方も学ぶことがある。発信することで働きかけることができる。自分もできることを考えよう。県内でも立場によって違う人のことを考えられるようにしたい」ということだった。



福島チームは、「語り合うだけでなく、語り継ぐことの意義や大切さを学んだ。東日本大震災に関わらず、様々な課題を自分ごと化して考えることが大切である。学んだことをどう理解し、周りの人にどう共有し、自分なりに実践するかということを探求することが必要であると実感した。さまざまな立場からの考えを学んだり、さまざまな職種の人と議論したりするを通して、対人援助職として多角的な視点から他者と向き合う重要性を痛感し、再認識できた」との報告だった。



現地の小磯厚子氏（白河市つどいの広場事業・おひさまひろば副代表）からは、「寄り添うとするみなさんがありがたい。福島は放射能

## 修了生による報告

### ～プロジェクトからの学びとその後

木下大輔さん（京都府教育委員会認定フリースクール学びの森教室長）からは、「むつに行った時、自分は何の当事者なんだろうかと考えた。阪神淡路は5歳の時で、覚えていない。自分の立ち位置をどこに定めたいのかわからなかった。

その経験があり、今、フリースクールで不登校の子どもたちと関わっているが、自分はどのような存在として活動するのかと、立ち位置を意識する。それは今も刺さっているプロジェクトからの学びと言えると思う。」



新谷眞貴子さん（NPO 法人家族・子育てを応援する会理事長）からは、「奈良県広陵町でNPO法人の代表として乳幼児の子育て支援をしている。公立中学校で教員として30年勤め、子どもや家族を見てきて、地域で家族の支援ができたらと大学院に入った。

震災の年、福島で被災した方と出会い、中学生と一緒に考えた。『わかって欲しい、忘れないで欲しい』と言われたその思いが

プロジェクトにつながった。福島に行き、レポートの終わりに『修了後にも発見があると思う』と書き、修了してからも、多賀城と福島プロジェクトに継続参加した。

5年前、活動に踏み出せなかった私に、『漫画展をやったらいいやん』と団先生に背中を押してもらい、震災で考えた漫画展やトークの意味を自分の町の人たちと考えている。子育てに寄り添い、地域に広げたい、つながる、共に発信。プロジェクトで自然に学んだこと、土地土地で生きるみなさんに教えてもらったこと、チームとして活動するなかで学んだことである。院生たちには要領オーバーがたくさんあると思う。それでも、後から支援の現場でわかっていくことがあるということを伝えたい。」



内田一樹さん（自由の森学園中学高等学校社会科教諭）からは、「2015年、増田先生と石巻に行った。埼玉県自由の森学園で高校1年生の副担任に入っている。生徒たちは、小学校入学時、3.11を関東で被災、今年コロナでまた入学式が延期になるという経験をしている。石巻に行って、景色、食べ

物も良かったし、のびのびして、得るものが多かった。自分の個人史の中で大きな意味がある。関わった人たちにたくさんのものをもらった。

石巻とは予定があれば関わり続けるようにしてきた。コーディネーターの阿部さんの紹介で中高生の学習支援の団体に参加し、子どもたちと関わった。去年もZOOMで学習支援をした。院生報告を聞いて懐かしい。直接聞くことで得るものがある。証人になるとはそういうこと。機会があれば現地に行って欲しい。文字で知ったことは、直接自分の経験からくる知に結びついて初めてより意義深いものとなる」



高井小織さん（京都光華女子大学准教授）からは、「むつに2015年に行ったが、前泊してあさこハウスや大間原発周辺に行った。これが大間マグロ、福島のおきあがりこぼし。ZOOMで懐かしい方々にお会いできて嬉しい。今、言語聴覚士養成の教員をやっている。京都の公立の中学に勤めていて、2015年に転職して初めて東北を自分で回った。

広島の前爆が落ちた地点に近い所で生

まれたので、核の問題は自分の中にずっとある。まず青森に行って、六ヶ所村や東通村など、自分から情報を取ろうとしないといけないなと思った。福島では、あぐりコーヒーやみんなの家でお話をお聞きし、それぞれ条件が全然違うなかで言いにくいことが増えていて、表面上は上手につきあっているけど、自分の言葉で語ってつながることができにくい状況になっていると思った。

今、マスクをして、口元が見えず、どれくらい伝えられていないのか。職場でもZOOMを使うが、これは視線がつかない。相手と一緒に向き合って話していくことが大事。客観的に離れて見て、単なるエピソードからも抽出されるものがあるのだと思う。振り返って、大学院に行ったことは長い人生のなかで良い2年だった。若い人たちが、学ぶということを外から受け取るものではなく、自分という歴史を積み重ねながらアウトプットしていく、そんなことができる人たちがどんどん増えるといい。私自身も聞こえない子どもたちを育てるお母さんのサークルと繋がっているなかで、福島と繋がっている。これからも関わっていききたい」ということだった。



## 鼎談「漫画展の働きについて」

団士郎さん、桜井忍さん(むつ市立図書館館長)、清武愛流さん(修了生、劇団Bridge industries 代表)による鼎談をした。最初に団さんからむつでの漫画展の写真が紹介され、「きれいな展示でゆっくり見てもらえるし、気に入っている」とのことだった。桜井さん、清武さんの順に思ったことが語られた。



桜井さんからは、「最初は、あまり被害もなかったのに、ここでやっているのかなと思っていたが、何年かやっているうちに、家族の問題はどんな場所でもあるのだから、ここでやってもいいのかなと思うようになった。毎年、先生方や院生のみなさんに来てもらって、遠い遠い親戚のおぼちゃんのような感覚で、今年も会えて良かったなと思う。

むつの図書館は薄暗い。図書館と言う場所柄、一人で来る人が多く、漫画パネルの前でじっくりゆっくり見ている人たち、ひとつの作品の前で佇んでいる姿をカウンターから見ていると、感慨が湧いてくる。出かけて行った先で、周りに漂う雰囲気も

味わいながら、漫画と対峙する。自分の過去の思い出や抑え込んでいた感情などが沸き上がってきて、漫画を味わう。

CDとコンサート、DVDと映画館がまったく違うように、漫画展のパネルが会場に届き、会場の雰囲気を纏い、同じパネルでも、各地で違ったものが受けとめられているのではないだろうか。コロナが落ち着けば、また違う場所での展示を見れたらと思っている」とのことだった。



清武さんからは、「2012年に入学し、前半の5～6年、漫画展にいた。いつも素敵な空間に展示されているが、自分自身の居心地は良くはなかった。ネガティブな意味ではなく、ポジティブに受け留めている。僕は、その違和感が好きで、ワクワクする。違和感は、そこから何が起きるかわからない。それをどう居心地よくするかを楽しんできたし、そうするなかで思ってもいないことが起きてくる。場と人との臨場感を伝えられたらと思う。もしかしたら、フラリと立ち寄る人も同じかもしれない。あたふたしながらも、振り返れば、普通に過ごしている人と一緒に存在してみようというところから始めていたと思う。

たとえば、むつには弁当を食っている人がいた。僕もそこで飯を食うことにした。スマホ触っている女子高生がいたら、僕もスマホ触ってみた。漫画展をどうするというのはなく、そこにいる人たちと一緒に過ごす。漫画を読みに来る人がいたら、冊子をどうぞとお渡しする。ただ、飯食ったり、スマホいじっていた人がいきなり接近してくるとびっくりする。小冊子が鍵になっている。これがなければ関われなかった。

時々、おしゃべりすることもある。おしゃべりしていく人たちは、ある程度試行錯誤して、乗り越えた経験があったり、その最中だったものがおしゃべりのなかで試行錯誤が完結していく。必死に自分の体験を伝えようとする人たちの多くは、微笑ましいというか笑顔で終話する。そして、あんた次の人たち来たから冊子もっていかなきゃだめだよと背中を押してくれる。

話さない人は多い。それも大事。話すこと、話せないこと、関われないこと、彼らから学び、応援されたことが多かった。オレンジ色のほんわかした暖かい空間だった。過ごしにくいけど、過ごしやすさもある。関係性を気にしなくていい間柄。人がちらほらいる空間だったり、少々ざわつきがあったり、誰かしらがそっといる。お互いにいることを感じながらいる。非日常だが日常でもある。彼らがどうなったかは知らないし、彼らも僕の先を知らない。だからこそ起きること、起きないことがある。漫画展にただいところから始まるものがあった。僕も応援されている立場だった」ということだった。



団さんから、「漫画の展覧会をすることがある。さまざまな展覧会があるが、プロジェクトでは、4県で場所を模索してきたなかで、図書館は合うなど感じている。多くの場合、表現者は何かを見てもらおうとすると、誰に見せたいというのがあるが、私の場合は、私の描いたものを見てもらいたいというのが主ではなく、どなたがいらしてこの作品を見て頂けるのか、来場者を待っている作品である。図書館に並んでいる本は、読んでと主張しない。誰かの手にとられるのを待っているというイメージがある。そんなにたくさん人が来なくても、じっと見てくれている人たちがいる。

たまたま声をかけると、『こういうことあるよね』と、その人のことが語られることが何度もあった。物語を呼び覚まし、物語に人々の場の提供。図書館は、ある程度の時間いても、誰からも不審がられないという世の中でも珍しいところで、そこにあの物語が置かれている。

前提としては、どの人にも物語がある。京都の京阪三条で漫画展をやった時、院生たちがインタビューしたら、ずいぶん多くの人、特に年配者がたくさん語ってくれた。東北での漫画展でも、それぞれの場所で今のようなことが起こっていて、語られなかったかもしれないけど、物語を秘めたパネル

と物語を持った人がそこで出会うというプロジェクトだった。直接被災に関わってではなく、こういう形で漫画の展示をして見てもらうという枠組みを十年続けてきて、これからも続けていけるといいし、またあらたな場所でもできるといい。これからも継続展開できたらいいなと思っている」ということだった。

さらに、桜井さんから「たしかに年配の人ほどよくわかる。私も年齢とともに物語が深く刺さるようになった」と、清武さんから「人と人が直接つながっているというより、物を通してつながっていく。ゆるやかで末永くつきあっていける関係。その場所の決められた範囲で一緒に過ごしていけるというのは、人の日常の姿だとあらためて感じた」との言葉があった。

## 第1部への福原悠介さんコメント

福原さんは、1983年宮城県仙台市生まれ。アートプロジェクトや民話語りなど、地域の文化を映像で記録するほか、「対話」をテーマとしたワークショップを行う。主な監督作に『家にあるひと』(2019)、『飯舘村に帰る』(2019)など。また、小森はるか監督『空に聞く』(2018)、小森はるか+瀬尾夏美の『二重のまち/交代地のうたを編む』(2019)などにも参加。記録集「セントラル劇場でみた一本の映画」がある。

ここまで全体を通して聞いて、継続することの力を実感した。今回、コロナでオンラインになったが、それでもできること、それでしかできないことを模索している。これ

までオフラインで継続してきたことが、それを可能にしている。一からこの関係性をオンライン作ることではできなかったと思う。継続して現地で作ってきた力、粘り強さに頭が下がる思いである。

むつの報告を聞き、東日本大震災と言うと、どうしても宮城、岩手、福島を思うが、原発の問題、青森の津波被害など知らなかった。チューリップ祭りやあさこハウスの柔らかい抵抗の仕方や、恐山の話もなるほどと思った。震災で死者の声を聞くことがあらためてクローズアップした。杉浦さんの「本当に会いたかった」という声を聞いて、継続していくことの形を想った。

多賀城・石巻は、自分も宮城なので、震災ボランティアでよく行った。大川小は居たたまれない気持ち。丸山さんの「天気は変えられなくても、人の行動は変えられる」という言葉は、現地でいろいろなことに取り組みまれてきた人の言葉だと思った。

宮古では、獅子踊りや民話など地域に伝わってきたものが、コミュニティの歴史を連綿と繋いでいる。とくに岩手はそういうものが多い土地だと思った。村本先生の「ゆるやかな遠くのつながり」という言葉、そういうものが近くの強いつながりと別にあるのだと思った。斎藤さんのコメントで、「十年一区切りではない」という言葉が印象に残った。

福島は、子育ての問題、放射線の問題があり、他の地域と違う。地域が単に断絶したというだけでなく、非常に語りがたい実際の

ある。出て行った人、帰ってきた人、現地に残って子育てしている人の話しずらさ。「飯館村に帰る」の映画を撮ったが、村に帰っているのは高齢者なので、若い人のことをあらためて知ることができた。

修了生の皆さんの言葉も印象深かった。被災者でない自分が何者として関わるのかを問うことが大切である。継続の力を実感されてきたことが伝わって来た。その時わからなくても現場の実感として理解することがある。僕も同じことを考えることがある。何かわからなくても現場の言葉や体験を浴びてみることも大事だと思っている。文字ではなく、直接経験することの大切さ。民話の語りともつながるものを感じる。

それから身体的なコミュニケーションを研究されていたのが印象的。マスクで表情が見えない、口の動きが見えない、ZOOMで視点が合わない、身体的なレベルでコミュニケーションできないなかで、どのように関係を作っていけるのかを考えさせられた。

漫画展のことでは、桜井さんは、被害は大きくなかったが、その場所でやる意味は何かを問われた。漫画になった誰かの物語を見るという行為から、そこにある種の普遍性が生まれているということだと思うが、そこに通じ合うものがある。

空間の問題、ライブとCD。単に情報として受け取るのではなく、現場で見ることの意味も印象的だった。

清武さんも場の話をしていて。展示会をどう作っていくかの試行錯誤。快適さを作るだけでなく、ノイズかもしれないものや

場のルールがぶつかりながら模索していくというありかたは印象的だった。場に対する感覚が鋭敏なのだと思った。話さないことも大切。

団先生は、滞在してもらう場を作って、他の人の物語に自分の物語の連鎖反応を引き起こすものとしての漫画ということだったと思う。それがプロジェクトの中心になっていることの意味、十年継続していることの意味がある。誰かの物語が誰かの物語を生むのである。

### 中村さんコメント

私はおもにむつに関わって来た。十年、年を取ったなということと、次につながる若い人たち、修了生の再活性化が連綿と続いている。縦糸、横糸、斜め糸のような形で、十年というある区切りで出会った人たち。留学生たちもいて、世界各地の災害や原発事故、危機とともにある時代にこういうつながり方が大事だなと思う。次の十年どうするかと考えながら、こんなふうに拡がりのあることをしていたのだとわかって、元気をもらった気がする。



## 第2部 映画「飯館村に帰る」の鑑賞

第2部では、福原悠介監督による映画「飯館村に帰る」を鑑賞した。



### 「飯館村に帰る」

監督・作品提供：福原悠介／出演：島津信子（2019年／55分／日本／Blu-ray）

東日本大震災による原発事故の影響で、思いもよらず避難しなければならなかった福島県飯館村の人びと。避難指示が解除され、6年以上続いた仮設住宅での暮らしから、村に帰る選択をした村民たちは、かつての村の様子や帰村後の暮らし、村への想いを語る。語りを聞き、身ぶりを捉えた映像の記録。〈短編プログラム〉

映画鑑賞に先立ち、福原さんから、「震災後、仙台で映像記録の仕事をしたが、『聴くこと』をテーマとして考えるようになった。大災害後、後世はどう聴くことができるのか。『飯館村に帰る』は、みやぎ民話の会の島津信子さんが聴き手を務めている。島津さんから、飯館村の仮設住宅に通い、避難指示解除後に村へ帰った人を訪ねて話を聴くので記録して欲しいと言われた。作品性は弱く、いわゆる映画にしては何も起きない感じがするかもしれないが、島津さんが長年仮設に通って関係を作った人たちとの会話をそのままに感じてもらえたら」という説明があった。



## 第3部 座談会「こころの復興と聴く力」

第3部では、千葉晃央さん（修了生、家族支援と対人援助ちばっち主宰）がファシリテーターとなり、福原悠介さん、島津信子さん、2020年度院生プロジェクトメンバーである葛西優花さん、寺岡一江さん、前田留里さん、若洲花菜翠さんがパネリストとなって座談会「こころの復興と聴く力」を開催した。

**福原：**先ほど少し触れたように、私は、「聴く」とはどういうことなのか考えながら、震災後、映像で記録してきた。民話語りの記録や地域のドキュメント映像など、最近では、瀬尾夏美さんと小森はるかさんの『二重の

町』のドキュメンタリーの撮影編集をやった。

もともと仙台の生まれで、東京の大学に行き、自主製作の劇映画を撮っていた。その後テレビや映画の現場で働いたが、挫折して、2010年、仙台に戻った。いわゆるニート状態だった時に震災が起き、自宅の被害はそれほどなかったのですが、せめてボランティアでもと石巻に通うようになった。

車がなかったので、せんだいメディアテークのボランティアのバスツアーを利用させてもらった。メディアテークはいろいろな活動をしていて、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」というのをやっていて、そこの手伝いをするようになった。いろいろな人が登録して、いろいろな記録を集めてアーカイブしていく。みんなでそれらを見て、話し合ったり交流したりする場所としても使われていた。おもに映像を使っていたので、過去の経験を活かすことができ、活動のプラットフォームができた。

そこでやったことなかでも、民話の記録、みやぎ民話の会の小野和子さんとの出会いは大きかった。小野さんが聴き手を務めて語りを聴くドキュメンタリー映画「うたう人」の撮影にもカメラマンの1人として参加した。民話に特別な興味があったわけではなかったが、山荘に泊りがけで行って、初めて目の当たりにした民話の語りの方は、すごい場だった。昔、おじいさんやおばあさんから聴いた民話が語り手さんの体にあって、それを声で語る。信頼関係と言ってしまうえば簡単だが、それで言い尽くせない場。聴き手が小野さんであるということ語りが生まれてくるのがよく伝わ

ってきた。民話を語るというと、一方的に観客に語るイメージがあったが、パフォーマンスではなく、語り手と聴き手で共にその場を創り上げていくところに民話が発生していく。共にある場に発生する何かと感じられ、衝撃的だった。

このドキュメンタリー映画は、濱口竜介さんが撮った「波の音」「波の声」に続く三本目で、東北三部作だった。その後、濱口さんは、「寝ても覚めても」でカンヌに行ったり、脚本を書いた「スパイの妻」が大ヒットしたりで活躍している。最初の二本は被災した人同士が向き合って語るというドキュメンタリーで、三本目は被災と直接関係なく、民話を語る。

たくさんの方がそこで起きたことを記録しようと東北にやってきた。濱口さんもその一人だった。津波でなくなってしまったものは記録できない。語りしか残らない、とにかく話を聴くしかないと言う時に、我々はどのように聴くことができるのかというなかで、語る・聴くということがテーマになったと思う。普遍的な営みに視点がフォーカスして行って、その結果、民話というところまで行ったのではないかと思う。

濱口さん、瀬尾さん、小森さんなど若い表現者たちが、小野さんたちが50年近くやってきたことに共鳴した。自分もその一人である。小野さんについては、『会いたくて聞きたくて旅に出る』という名著があるので読んで欲しい。みなさんのプロジェクトにも根底に聴くということがあったのではないか、接点があるのではないかと思う。

「飯舘村に帰る」の聴き手である島津信子さんは、みやぎ民話の会の代表で、長年、小野さんと一緒に民話を聞いてこられた。丸森に住んでいて、飯舘村の人たちの仮設住宅に通っていた。避難指示が解除され、村人たちが帰還して会えなくなるので訪ねたい、あらためて映像で記録して欲しくないかと言われ、「わすれないセンター」に所蔵することを前提に引き受けた。

初回はカメラを持たずご挨拶に行った。談笑されている光景から、とてもいい関係であることが感じられ、ジャーナリスティックな視点で福島状況を切り出すというよりも、島津さんとの関係を撮ろうと思った。それで、照明も使わず、小さなカメラとマイク、最低限のもので撮ると決めて行った。

編集のために何度も見直してみると、震災の話だけでなく、嫁入りの話や家出の話など、直接震災と関係ないパーソナルな話があり、そこで飯舘村ってそんなところだったのだなと感じられるようになった。どうしても被災地、被災者というイメージが先行してしまうが、現地の人々にとっては、そこに住んできた生活の時間があつての震災である。

そういうところを中心に編集しようと考えた。それは、みやぎ民話の会の姿勢が生み出したものでもあると思う。話だけ採って来ようというのではなく、どんな状況で民話を聞いたのか、背景にある暮らしも含めて丁寧に聴くという姿勢で、情報だけ採ってくるのではない聴き方が生み出していたものを撮影したものから発見した感じだった。



また、カメラマンとして現場にいて編集するという立場で、僕はいったい何を聴いたんだろうと思った。聞き手は島津さんだが、撮影しながら二人の声だけでなく、自分も何かを聴いていたという実感が何となくあつた。この実感は何なのかを考えた。

まさにカメラで撮ったことによって聴いたこと、何度も撮影したものを見直す編集のなかで、何でもない話から村の土地の実感が伝わってくるということを発見していく。

どういうことなのかよくわからないまま、その時に何かを聴いたという実感があつた。聴くというのは、音声を受け取って、言語を解釈してというだけでなく、撮影でカメラを向け、その人をどう撮る、どういう存在なのかをカメラを通して通して感じる、それも聴くことだった。編集で何度も見ることで、そこで起こっていることを発見していく。その時に何かを聴いた実感が生まれる。音声を聴き、とにかく言葉を交わし合うということだけでなく、相手の存在を受け取るプロセス、受け留めるといふ行為も聴くということではないか。カメラを回しながら僕も聴いていたのだという実感があつた。

団先生の漫画も、聴いたことを漫画としてアウトプットしているのではなく、漫画を描くこと、展示すること自体が聴くことなのではないか。語っていることでさえ、おそらく聴くことなのではないか。なぜかと言えば、飯舘村でカメラで撮って、誰かの存在を受け取って、その体験が、今こうして僕に語らせている。この映画を撮るなかで、聴くということをそんなふうに理解するようになった。

みなさんのケアの現場でも、相手が必要としていることを聴いて判断し、アクションを起こすというプロセスがあると思うが、結果的にケアがうまく機能したとしたら、ケア自体が聴くという行為そのものなのではないか。その人の存在を受け留めるプロセスに聴くという行為が入っているはずだから、単に話を聴くだけでなく、存在をひっくるめて聴くこととして捉えたい。そんなところで、みなさんとの接点があるのではないかと思う。

**島津:** 福原さんから小野和子さんの話があったが、震災後、いろいろご縁があって、福原さんにも映像で記録する活動に入ってもらった。福原さんの撮られる映像はすごくきれいなんです。音声も丁寧に拾ってくださっている。福原さんって、良い仕事する人だなあと思っていた。

ご縁があって、国頭にあった仮設住宅に何度かお邪魔して、最初は昔話を聞いてもらって楽しんでもらえないかな、あわよくば村の民話を聞けないかなと思っていたが、「貧しい村で、昔話を聴く余裕なんかなかった。働くことでみな精一杯だった」

と言われた。村に帰って縁が切れるのはしたくないと思い、村を訪ねてお話を聴こう福原さんに声をかけたのが始まりだった。

実際に撮ってもらって、福原さんへの信頼があったので、聴き方は甘いし、反省点も多いが、編集は福原さんに任せようとお願ひした。福原さんがどんなふうに編集してくれるのかという興味もあった。見てなるほどなと思うところがたくさんあった。私自身が原発からの避難を前面に出すより、飯舘村ってこんなにこの人たちにとって大切な所だったということが伝わればいいなと思っていたら、そのとおりの編集だった。

それで終わったと思っていたが、福原さんは、この映画を、山形の国際映画祭、東京や福島、バリアフリー上映の映画祭など、あちこちに連れて行って、多くの人に見せてくれた。映画に仕事させてくれることをありがたいなと思っている。

飯舘村のもう少し若い世代が思っている違うのではないか。できれば、コロナが落ち着いたら、また村を訪ねて第二弾を撮りたいなという思いでいる。



**福原：** バリアフリー上映では、どう届けるかということを考えるきっかけにもなった。今は、誰でもスマホで撮れて発信できる時代なので、何か作って終わりというのではなく、届け方まで考えて作る必要がある、届け方を含めて記録であると考えようになった。

**葛西：** 香川県出身で地震とは縁のない生活だった。大阪に入って一人暮らしを始め、2年前に北摂地震があり、生まれて初めて地震の怖さを経験した。それまでは、地震と共に生きてはこなかったもので、興味を持って、多賀城・石巻のプロジェクトに参加した。現地に行かずに理解できるのかなど不安もあったが、シンポジウムの打ち合わせなどで話し合ったり、共有するなかで、少しずつ馴染んできた。

そうやって入り込めたというようなところで、この映画を観た。今日で3回観たが、それぞれ村との関係も思いの形も違う人たちで、多様性があるのが興味深い。お話の途中で入るのどかな景色と、対照的に車の走る場面や工事の場面も印象的だった。

語っている言葉に大きな力があり、聞いている自分がドキリとさせられる瞬間があった。「原発を作った人は馬鹿だ」という強烈な言葉と柔らかい表情もあり、何とも言えない表情で聞いている妻の様子も感じられた。地震とは一切関係ない生い立ちの話などが気になって、なぜそういうお話が映画に組み入れられたのかと考え、ずっと暮らしてきた日常が想像できるからこそ、その当たり前がガラッと変わった様子がわかると感じた。



**前田：** 私にとって東北は縁のない土地で、プロジェクトに入るまで詳しいことは知らなかった。

全体を通しての学びは、まだまだ終わっていないこと、その根深さ、失ったものの大きさ、復興までの遠さだった。同時に、人のつながりを感じる。

映画は、じわじわくるものだった。声なき声を聴くというか、「被災者」ではなく、そこで生きてきた人があるということを感じる。当たり前の日常を奪われることの辛さ、それは放射能より辛い。自然のなかで生きてきた人にとって、私たちのように便利さを優先する方が不自然で、そちらの方があるべき姿なのかなど。だからこそ、そこにフレコンバックがあるというのが異様な光景だった。自然を大事に、自然と共に生きてきた人たちが、その異様な風景のなかで暮らさなければならないことを思った。

団先生の漫画展にあった、見ている人の場と共通するそこにある空気感、眼に見えない空気や場の力、そこに発生するものがあるということが印象に残った。



**島津：** 午前中に出てきた「自分ごと」ということがひっかかっている。30年くらい前に宮城沖地震があり、近いうちにまたあるよと言われていたのに、私にとってはずっと先だろうと思っていた。それが大震災があり、もうすぐ十年だねというところで、今日もまた起こった。

いつ何が起こるかわからない。その後に台風もあり、先日の地震で、津波から逃れて、ようやく再建したのに、また先日の地震で家が壊れた人。放射能から逃れて、丸森に家を建てた後、台風でまた被害に遭った人。そしてコロナもあり、何気ない日常が一番大切なんだとあらためて感じる。

この映画は、見る人によっては、もっと放射能や避難を前面に出して聞いたらいいんじゃないのと言う人もいるかもしれないが、全村避難は周知のことだと思うので、そのなかで暮らしてきた人々の暮らしが奪われて、それでも戻ってきたんだなと感じてもらえたらと思う。

「もう十年」かもしれないけれど、この十年、一人一人の時間は違う。全体の十年は一括りにされるが、一人ひとりで年老いていく。映画に出てくる元正さんは亡くなったし、最初に語った佐藤さんも今は入院している。体調を崩されたり、一人一人の十年は

ものすごく大きい。

村全体で考えた時、30年後、はたして何人暮らしているのかな。こうやって少しでも多くの人に知ってもらふこと、自分ごととして感じていって欲しいなと思う。こういうことを通して、人と人とのつながりが震災をきっかけにできているということは評価していいことだと思う。良い方に捉えて、アクションを起こせたらいいと思っている。

**福原：** 静かさと音の対比、映像的なことに気づいてもらって嬉しい。場の力と言う言葉が出て来て、団先生の話ともつながってくる。一方で場がない。飯舘村の方々は、仮設にいた時はみんながいたが、戻ってからは、高齢化も進み、移動も難しい。人が減っている、若い世代は帰ってこないというなかで、そもそも場がない。場の重要さと困難さを思う。みなさんのプロジェクトは、これまで作ってきた場があることで、これからも作っていける。島津さんの自分ごとということ、院生のみなさんに逆に聞きたいが、プロジェクトに参加しようと思って、あるいは参加して、どのへんが自分ごとですか？

**葛西** 地震を初めて経験した時、死ぬんじゃないかと思って、震度とかは全然違うが、それでも怖かった。その思いでプロジェクトに参加して、現地の方の被災体験を聴くなかで、リンクするところがあった。揺れが起こった時の心情を近く感じた、誰にでも何が起こるかわからない。起こると恐怖を持つ。リンクしたことで、自分ごと化したように思う。

**前田** 友達ができ、おとし初めて石巻に行った。日和山に連れて行ってもらい、そこからの景色を見ながら、そこに被災時のみなさんの写真があった。今見ている穏やかな遠くの海がどういう状況だったかと想像した時、これまで私が知らずにきた時間に、みなさんはすごい思いをしてきたんだなと思った。

同じ日本に住んで、同じ年月やってきたこと、当たり前前にできていたことができなくなった。その時に、知らないことは罪だなと思った。同じ日本なのにこんなに違うんだ、知らないことがたくさんあるなど。プロジェクトで学んで、どういうプロセスを経て今にいたったのか知りたい、知らなければいけない、語り継いで次の世代にも伝えたいと思う。現地に行った時のショックから自分ごと化はあったと思う。

**若洲:** 私は関東出身で、都内で震災を体験した。映画を観て、二人目の方が、息抜きにと町内で楽しいことをやったら、「被災したからお金もらっていいね」という心無い言葉や嫌がらせをされたというのを聞いて、「自分だったらしないけど、その人の気持ちもわかる」というところが印象に残った。

思い出したのが、震災の時、下校中で電車が止まって、大人が駅員に寄ってたかって怒鳴っていた。あの日一番ショックだったこと。それが思い出された。物理的なもので壊されるものがあるが、心理的な面でも人を変えてしまうところがあるのかなと一番に思ったところです。

それから、飯舘村は貧しい村と言っても、どの人も飯舘村が好きなんだなというのが伝わってきた。東北と聞いて、思い浮かべら

れるものが漠然としていたが、思い浮かべられるお顔ができたり、土地のお祭りや民話がパッと思い浮かべられるようになったのが自分の中の変化だと思った。



**寺岡:** 私はプロジェクトに導かれた印象を持っている。社会人1年目に阪神淡路大震災を経験した。生まれて初めて兵庫の海辺に釣りに連れて行ってもらって、初めて震災に遭った。私は早めに自宅に帰れたが、本当にホッとした。2年経って帰れない、何年先になるかわからないというのを聞いて、いったいどんな思いだったんだろうと重ね合わせて聞いていた。

東日本には、家族旅行でも行ったし、初ボーンラスをもらって1週間旅した。お世話になったのに、その後訪れることができず、後ろ髪をひかれる思いの時に、十年続いているプロジェクトがあると知って、関わってみたいと思い参加した。

映像を何度か観て、見るたびに変化がある。島津さんが「あなたにとってどんな村？」と優しく、でも鋭いなと思ったが、聞いた時、トップバッターの佐藤さんが「仕方なく」と言いながら、ご夫妻が向かい合って、その間に島津さんがいて、2人が互いにうん

うんと聞いているのを見て、そこに暖かい空気が流れていた。

若洲さんが言っていたように、いろんな人から言われたというところが気になっていたが、仮設に入った時は馴染めなかったが、1年経って喧嘩するようになったんだというのを聞いて、仲がいいというより、ぶつかるというのも大事なつながりの要素で、そこから生まれてくるものもあるのかなと思った。



**島津** お金の話が出たが、村の人、双葉や大熊、原発の影響で家を離れなければならない人にはそれなりのお金が出ている。村の人からは、帰村してお金が出なくなったと聞いた。もうひとつ、大きく農業やっていたり、酪農でも手広くやってきた人には、仕事をしなくても、それだけの補償金が出ている。家を何軒か建てたという話もあるが、補償金が出た。

周りの人が言うのもまるっきり見当違いではないということもあり、それでも、自分の住んでいた土地を離れないといかないということへの補償は当然。働かなくてもお金が入ることになって、その方の生き方がまるっきり変わってしまった。人間ってあ

る程度働いて、労力にあわせて賃金もらってという感覚が変わってしまった人があるというのは大きな弊害ではないか。

一人ひとり事情が違うし、その人の感覚がまるきり変わってしまうんじゃないかな。家族関係やコミュニティが壊れてしまったという問題は表に出ないけど、そういうこともたくさんあったんじゃないかなと思う。難しい。申請にも膨大な提出物が必要だったり、一概に言えないところもあるが、本来あるべき姿から大きくはずれてしまった人もいるのかなと。お金の話は難しいですよ。

**福原:** 若洲さんの話はリアルだった。それも一種の被災だと思う。当時子どもだった人たちが、被災地にも、少し離れたところで間接的に体験した人もいただろう。9年経って「あの体験は何だったんだろう」と、当時子どもだった人たちが言葉を獲得していく時期なんだなあと思った。取り乱した大人を見るという経験、たしかにそういう視点もあると思う。今、瀬尾夏美さんが、十年前に子どもだった人たちの震災の聴き取りをして、劇団の俳優が朗読するという「十年前、子どもだった私は」という取り組みをしている。

寺岡さんの話で、和夫さんの仕方なく言ったというところ、僕もすごく好きで、東北人の気質というか、なんかわかる。「いいところですよ」などとは言わない。照れもあるだろうが。もしマスコミの人に聞かれたなら、サービスで話したかもしれないが、素の話し方が出ていて、そこに注目してもらってありがたい。仮設で1年経って喧嘩するようになったというところ、僕も好き。即席のコ

コミュニティでは、そこでやっていかなければならないから、互いに気を遣い、助け合いながらやっている。喧嘩できるほどのコミュニティを作るにはどうすればいいのかな。

**前田:** 一番初めに観た時、菅野フサコさんの話が、始まったばかりのところで終わってしまったのが、アレと思っていた。何度か観るうちに、そうかと。こうやって、これから語ろうとする人がまだまだいるんだな、いったん切り取ったものの、まだまだ聴くことがあるんだなという広がりが見えた。

**福原:** まさにそういう狙いで、いろんな事情があって、そんなにたくさんフサコさんの話が聞けなかったということもあるが、切りたくなくて、その場にいてくれるだけで語っている、存在だけでいいというつもりだった。編集上の考えとしては、これからも続いていくという一種の余韻。清武さんが「話さないことにも意味がある」と言ったが、必ずしもみんなの前で言葉にしないといけないということではない。語ることで語られないことをセットで考えていくことをラストに込めたつもり。

**島津:** 第二弾をとりたい、話を聴き続けたいと思うのは、ちょっと見方を変えていくことで、また違う印象があるだろうなど。この方々と一緒に旅行したことがあるが、おみやげに水仙の球根を買った人がいた。村に帰ったら植えて水仙ロードにするんだよと言った人がいたことが忘れられない。

聞き方が弱いものもあるし、親しくなったからこそ、余計聴きやすくなったこともあり、聴き方によってまた違った話が聞ける

んだらうと思ったり。

宮城では揺れるのが当たり前のようなところがあり、地震に大きな印象を受けたという話を聞いて、土地柄の違いを感じ、こうやってやり取りすることで想像力を働かせることが大事なことだなとあらためて思っている。今まで民話を聞いたりしてきたが、まだまだ甘いなど最近思っている。

こんなふうに、まるきり離れたところで話がやりとりできることは嬉しいことだし、それをきっかけに、調べてみたり、何かの機会に足を運んだり、自分ごとにしていけるといいなとすごく思いました。

## ブレイクアウトルームでの交流

ここで、3~4人で10分ブレイクアウトルームを設定し、その後、少し共有してもらった。

・故郷を想う気持ち。飯館村貧しいと言うが、きのこや山菜もとれて、牛や馬がいて、人と人とのつながりもあるのに貧しいとはどういうことなのか、何か起きた時に水や電気がなくなったら急に不幸になるが、ミャンマーとかは何もなくても幸せだという。

・島津さんの優しさと鋭さのバランスが話しやすさを作っている。飯館村に行ったことのある人がいて、そのことを思い出した。自分ごととして捉え直したい。

・保育士教育の現場で、存在を受け取るところ、想像力をもって関わると力強く語られた。

・阪神淡路や熊本、北摂地震の体験者が語

られた。周囲とのギャップ。震災の体験をしていないから、薄っぺらな理解だと意識しながら模索していく。

・ふつうの映画との違い、普通の人がこんなにきれいに映されている。空気感を丸ごと切り取ったような映像だった。自然の撮り方、想像力で見ていく映画だな。

・現地の方の話で、教師の経験があっても、聴く力に気づいたのはずいぶん後になってからと聞いて、語りが大事とは知っていたが、今回のプロジェクトで聴く自分に気づけたことが大きかった。

・飯舘村に行った院生がいた。メディアは大変だったこと、あるいは逆に乗り越えた話ばかり強調する。親しいからこそ話せないことがあるし、親しいだけでは話せないことがある。

・声を荒げていないところが印象不快。穏やかに語るからじわじわくる。震災同時の子どもへの興味。



**加藤：** この作品を多くの人に見てもらったことに感謝。島津さんは聴くことに反省しているが、自分たちは長く小野さんに教わってきたのにわかっていなかった。百年後に残っていく時、大事だなと、こういうことが残っていくということが感じられる映画だった。



**大平：** 毎年皆さまが遠野に寄ってくれて本当に嬉しくて、沿岸に来ていたのは知っていたが、こんな巨大なプロジェクトだったとは初めて知った。こういうことだったら、もっと話も変わったかと思った。知らないことは罪だと。被災地を見に来てくれるのはありがたいと思ってきたが、大きなプロジェクトの経緯を知り、あらためて感謝の気持ち。若い方々がちょっと口にしたことを、すごく端的に捉えて伝えてくれる

ことがすごい。映画で声高に叫んでいないことがじわじわ伝わってきてすばらしい。子どもたちの声も楽しみ。



**丸山:** 当時大変な思いをしたかもしれないが、感謝の方が多い。皆さんから大きなエネルギーを頂いている。こんな場を作ってもらって感謝でいっぱいだし、これからも続いていくことを切に願っている



**島津:** 皆さんの声を聞いて、この映画の意義を見直している。バリアフリー上映で字幕がついて見ると、また違って見えてくる。今日は皆さんの感想を聞いてまた違った見え方に。いつもカメラを抱えてもくもくと作業している福原さんが、こんなに考えて語られた。小野さんがよく言う「自分のなか

に民話が残った」という話。震災を縁にして、人と人の縁ができて、十年経ってまたあらたなご縁が出来たということを前向きに捉えて進んでいけるということはいいことなんだな。プロジェクトを十年続けてもらったことで学ばせてもらった。

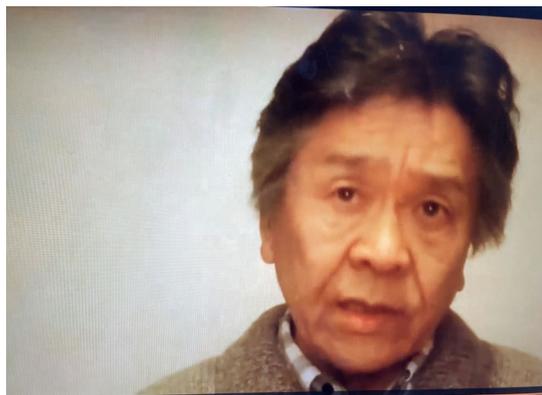
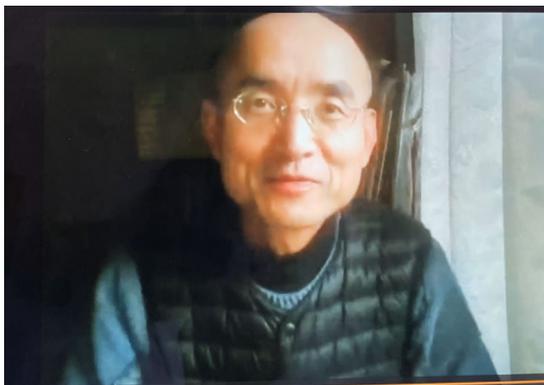
**福原:** 長時間ありがとうございます。何度も観てもらって、感想を聞かせて頂き感謝します。

午前中から場の大事さをあらためて感じた。今回はオンラインで、映画が起点にある。プロジェクトには団先生の漫画が起点にある。ある時パッと作るのではなく、皆さんが十年間やってきたことでこの場ができている。この場だからこそ生まれたものがあるのだと思う。

**平田:** 今年度は不安で始まったプロジェクトだったが、現地に行ったらイベントを遂行することが中心で、今回は深くお話ができたことがよかった。これが継続なんだなど。映画も4回観たが、観るたびに気づくものがある。継続し、反復しながら学びが深まっていくんだと思う。



**鵜野:** 皆さんの声を聞かせてもらって、とても良い会になったなと思っている。どういふ形でこれを続けていくのかなと案を考えながらいるところ。続けていけたら。



つづく

**田:** いろんなことを興味深く時間を過ごした。映像としてモノを作る、記録として残していく。未来の人のために届けるという意味合いもあるが、今のこの時代にモノを作ることの意味、いろいろな意味をつくるというひとつが福原さんの作った映像だなと思った。

事件や出来事や騒ぎを話題にするという傾向がある。紅葉や夕焼けが綺麗と言う日常、こちらが本当の目的なんだということが伝わらないと。望ましくない災害や事故が起こることは多いが、それでも人はああいうふうに生きている。出来事中心でなく暮らし中心に描かれた。私が漫画を描くにも気をつけているところで、それが一番美しいと思う。